十年後の故郷とうほく　十年後のわたし

気仙沼市立小原木中　三年　吉田

気仙沼市唐桑町大沢。美しい自然の山々に囲まれ、透き通る紺碧の空と海を前に、切り立った白亜の大理石海岸が広がります。遠く、太平洋を望めば、大きな船が行きかい、近くには地域の方々の船が漁をする姿も写る、とても活気づいた町です。幼い頃は、夏になるとカブトムシを取ったり、冬になれば、凍った田んぼでスケートをしたり、懐かしい光景が走馬灯の如く甦ってきます。しかし、あの日、三月十一日を境にすっかり変わり果てた大沢が今、自分の目の前にあるのです。

「ゴオー」と地鳴りがしたかと思うと、激しい揺れが……。海岸を見ると、海の底が見え、ものすごいスピードで波が沖の方に吸い寄せられていったのです。その後は、真っ黒い何メートルもの大波が、何もかも奪い、流し去ったと聞きました。次の瞬間、両親のことが気になりましたが、無事を祈るしかありませんでした。何日間か両親に会えず、小原木中学校の体育館で、地域の方々と過ごしました。すると、近所の方が、「お前の父ちゃんと母ちゃん、孤立して帰って来れなかったみたいだ。」と教えてくれました。父や母に会えたときは、涙がとまりませんでした。安心するのもつかの間。家に戻ろうとすると、この間まで普通に歩いていた道も家も、すべてのものがないのです。がれきの山で、あまりの変わりように言葉もありません。悲しいとか、悲惨だという感情すら起こりませんでした。「大沢が消えた。」という思いが後から後から涙を呼ぶのでした。この先どうなるんだろう。考えても答えがでないまま、日々の生活を送るのが精一杯の毎日でした。

その後は、地域の方々と食料を持ち寄って一つの家で、生活を共にしていました。毎朝五時起床、薪割から、火おこしなど、僕にとっては初めての経験です。近所のおじさんに教えられながらの必死の作業でした。今までの生活が幸せだったことを、目の当たりにした瞬間でもありました。辛くないと言えばうそになりますが、そのときは、みんながいてくれたことが何よりも心の支えでした。

僕の通っている小原木中学校は、昨年度から、長崎青少年ピースフォーラムに参加することが決まっていました。平和について考えるものです。八月僕は、その行事に生徒会執行部として参加しました。長崎に着

くと、被災地気仙沼から来た」と、励ましの言葉をたくさんいただきました。過酷な状況に耐えてきただけに本当にうれしかったです。そんな折り、長崎原爆記念館に行く機会があり、当時の写真を見て、僕は、驚きを隠せませんでした。それは、原爆で焼け野原になった長崎市街が津波に襲われ、何もかも流され、がれきと化した大沢に似ていたからです。原爆のことは知っていましたが、この二つの光景があまりにも似ており、津波後、はじめて大沢を見た光景と重なって仕方ありませんでした。しかし、長崎は原爆の災害から見事に復興を遂げ、現代に至っています。辛かったに違いない。復興までの道のりは、遠く、苦難の連続だったであろう。そんなことを考えていると、被爆したおばあさんに話を聞く機会に恵まれました。そのおばあさんは、「地獄だったねえ。」とにかく、みんなで力を合わせるしかなかった。」としみじみ語りました。それは、今がどんな困難であっても、多くの人が集まれば大きな力になることをあのおばあさんは自らの体験として僕に教えてくれたのです。

被災後、今の大沢は、復旧から復興への鼓動が、ゆっくりと静かに確実に動き出しています。僕たちも今何ができるかを考え、大人の人たちと共に故郷の復興に努めなければと思っています。今の僕は何ができるかわかりません。しかし、はっきり言えることは、人と人とのつながりを絶やさず、前へと進むことだと思います。このような状況で生きてこれたのも、周りにいる人たちとのつながり。そして、手を差し伸べてくれた自衛隊や米軍の皆さん。各支援団体の方々。いかにつながりが大切かを身を以て感じています。

今年の小原木中学校の生徒会テーマは「吹幸」吹く幸せと書きます。十年後、二十年後、もっと長い道のりかもしれません。でも、大沢は必ず復興を遂げ、幸せの風が吹いていることを信じてやみません。

僕の十年後。料理人をめざして、頑張っていることでしょう。震災後、僕の炊いたご飯を、大沢の人たちは「おいしい」「おいしい」と言って食べてくれました。それが何よりもうれしかった。決して贅沢なご飯ではありませんでした。でも、みんなで輪になって、わずかな食料を分け合いながら、食べた味は、一生忘れることはないでしょう。一人前になっているかどうかわかりませんが、あのとき、薪でご飯を炊いたように、基本の味を大切に、ほっとした味が伝えられる、料理人になりたいです。そして、その料理は両親、もちろん大沢の人たちにも食べてもらいたいと思っています。